

六
花

り

つ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

11月号

一



山田六甲

菊の花崖へ向かせて置かれたる
日を受くる山ひだの櫨はぜ紅葉もみじかな
山肌の葉裏に熟るる烏からす瓜うり
片膝を立てて柿もぐ屋根の上
目つむりて麴ぼ麴んを呑み込む星月夜
蹄鉄ていてつの額かぶたに海光秋の夕

桐きり一ひと葉はトタンの穴にかかりけり

秋暮れて船の灯あかしの残りたる

水源が現れにけり茸きのこ狩

秋の蜂耳の後ろへ回りけり

しみじみと匂ひつのりぬ藤ふじ袴ばかま

風邪気味の鼻を藤袴に寄する

秋あき桜ざくら爪立てて折り採りにけり

蓑みの虫の水滴まとひをりにけり

日が差せり石の割れ目の草紅葉

銀細工

鳥たちの憩ふ夏野の水たまり
入梅にゅうばいや湯を掛け流すふくらはぎ
冷房の音高く立つ部屋にをり
蝉しぐれ加熱されゆく銀細工
後おくれ毛の涼しかりけり夕端ゆうはし居
てのひらに石をのせ足す夏の浜
夏ともし声こゑ滲にじませて語り合ふ
藍あゐ浴衣背なをすべりてくづれ落つ
短夜のうなじを湿す薔薇そうびの香
闇と闇つなぎ合はせり不ほととぎす如帰

磯蟹の闘ひながら流れゆく

笹村 政子

軒低く小鰺干しあり漁師町
大小の刃物使ひて鰺開く
いくたびも海水すてて箱眼鏡
空蟬の風に姿を消しにけり

動物の闘いはおおよそ子孫繁栄の
為か食物確保の縄張り争いで、掲句
の蟹もおそらくその類の闘いである
のだろう。二匹の蟹は闘いに夢中で
互いが潮に流されていることすらも
忘れていた様子（動物本能の姿）を
活写している。
報告を超えているとはこのような
句を指す。写生俳句は限界であるか
のように言われるが取り合わせに逃
げなくても俳句は出来る証し。まだ
まだ写生句の将来はある。

いそがにのたたかひながらなれゆく

季語＝蟹（夏）

田水沸く
たみずわ

貝森光大

田水沸く酸っぱくないかカレーライス
かたつむり 蝸牛道の央なかばで居眠りす
 冷蔵庫みんな四角な貌かおになる
 人間は大きな蛙平泳ぎ
 雲の峰今壮年と思いおり

水星

梶浦玲良子

つちのこに賞金が出る生ビール
てんびよう 天平の蛭いづかを放つ 蕘いづかかな
 水星の覗きに來たる麦の出来
 第三のをんな近づく蟻地獄
 メガホンのかなたは蓮はちすの日のうねり

檀木集

ハンモック

三井 孝子

墨よりも先に半紙に汗落ちぬ
雨あとの蛙の声や空からも
螢籠狭みて寝入る 兄弟
手枕の昼寝の足は砂の上
ハンモックラジオの声消す波の音

滝音

K O K I A

八月や首傾ぎぬる壺飾る
熊蟬の温みの残る骸かな
滝音に閉ぢ込められてをりにけり
清流や河鹿の笛の湧きいづる
熊蟬の一直線に落ちてきし

鮎

佐原 正子

鮎つかみどりをさせたる梁簀かな
夕涼し家族総出のもんじや焼き
盃蘭盆の虚空蔵菩薩拝しけり
ゆるやかに御霊灯笼流しけり
列なして灯笼川を進みけり

滝音に閉ぢ込められてをりにけり

K O K I A

滝の落ちる音に閉じこめられているという感覚を素直に言葉にしたのがよい。たしかに滝の近くは崖に囲まれるような地形で滝音は大きく響き、身体全体が共振してそこから抜け出せないのではないかと錯覚さえ起こる。作者の言うように閉じこめられているという感じがする。

螢籠狭みて寝入る兄弟

三井 孝子

家族和楽の寝室の様子。特に、子を挟んで親が両側に寝ることを表す「川の字に寝る」という慣用語があるが、この句の場合は螢を入れた籠を挟んで兄弟が寝入っているのである。今夜捕ってきた螢を籠に入れて寝床で兄弟が飽かず眺めていたのが、いつの間にか寝入ってしまった様子を見て幸福感に浸っている場面である。

ゆるやかに御霊灯籠流しけり

佐原 正子

精霊流しに使う灯籠のことを地方によっては御霊灯

籠とよぶ習わしがあるのだろう。その灯籠をゆるやかな流速に合わせるかのように押し出した。そこには御霊となった故人や祖先への感情をも重ね合わさっているように感じる静かな灯籠流しの風景であり、ゆるやかな川の流れも含んでいる。

薔薇園のベンチに二人憩ひけり

池崎るり子

山の影湖面を暗くして涼し

いば 智也

熱き茶をすすりてをりぬ蟬しぐれ

岩松 八重

錆びついた線路バナナのたたき売り

角田 信子

月影の四ツ辻までと人送る

武田 美雪

しまひしをまた出してきし秋扇

延川五十昭

湯上りのペランダに立ち月見上ぐ

馬場美智子

くれのこる川の向うの盆提灯

松下 幸恵

冷し酒唇に添ひくる江戸切子

松本文一郎

友逝きてまた初夏を迎へけり

宮森 毅

青田風草刈の音近づきぬ

物江 昌子

虫籠の中を羽ばたき兜虫

わかやぎすずめ

籠とは囚われた側に立てばこれほど絶望的な打撃を与えるものはないだろう。カプトムシはその中に囚われの身となった。虫にその認識があるかないかは定かではないが、飛び立とうとしたその羽ばたきは無駄な行為となった。掲句はその虫の哀れを、「羽ばたき」という言葉だけで表している。

あめんぼう波紋消し合ふ波紋かな 森本 密夫

アメンボの様子をよく観察していると、アメンボよりも水輪や波紋の方に視線が行った。そして波紋がお互いにぶつかって波紋を消し合っていると発見した。俳句は辛抱の文芸でもあるという証明をした句。

露草に朝露光りをりにけり 延川 笙子

堰き止めし川で泳ぎぬ飛び込みぬ 筒井八重子

破芭蕉ただそれだけの平家かな 田尻 勝子

露草の花をちぎりて指染めし 三村 昭子

噴水の白き水輪の並ぶ濠 今本よしえ

嘴に蝉鳴かせつつ鳥飛ぶ 中瀬 定子

蝉の声耳のうなりとひびきあふ 菊谷 潔

寝そべりて腹を叩けり盆帰省 永田 勇

盆休みで故郷に帰省し、その安堵感からか早速寝そべって腹を叩いたとも思えるが、墓参りも済ませてむしろ二日目くらい、つまり休み期間の真ん中くらいの日ではなかろうか。だからこそ、このようなゆったりとした気分浸っているのだ。その様子を上手く詠んだ。

桃の汁腕を伝ひて落ちにけり 霜寄 恵美子

山頂で別れて来たり夏雲 平居 滯子

竿竹にあふるる産着紅芙蓉 大上 保子

舟を漕ぐ蘇州娘や百日紅 山本ミツ子

朝市の小さき名札の秋野菜 松本 蓉子

雨あがりおしろい花のにおいけり 金月 洋子

夕風や茜に遊ぶ漁舟 肥塚 泰男

夏痩せの頬をもちたる我の顔 金月 律子

西瓜切る母の手元の潔さ 黒田 令子

今日の目を焼きつくしたる夕日かな 松本千勢子

牛小屋にオルガンありて秋立つ日 出口 誠

整髪的首筋に早やあぶらぜみ 五ヶ瀬川流一

お尻から蜂の出てくる瓜の花 御影さざい

梅雨明けのからりと晴れて海の花 青木 洋介

洗濯の白シャツがもう汗くさし 山野 牙斗

ハンカチを濡らして頭かぶすかな 村井アジト

公園に走り回るよ鼠花火 寺家みのり

空き缶に残るビールを池に注ぐ 室生つみき

夏風邪や天井見つめ日が暮れる 澤井ガリブ

夏椿庭に落ちては有馬寺 堅山油味古

草むしり蚊が来て痒い気持ちかな 城山のりお

お話し投句 中村 たね

九十二の皺寄せ虫の声を聴く

あと八年で百歳を数えるたねさんは、遠くなった耳の代わりに九十二年間の年輪で虫の音を愛おしんでいる。それが人生の皺でありひだである。

六花集

山田六甲選

森本 密夫

あめんぼう波紋消し合ふ波紋かな

ちやつかりと古巢に育つつばめめ子

蛸ひぐらしや声を揃へて谷渡る

露草や長ひげづらに福耳を

早朝や我が物顔蟬の声

延川 筈子

昼の川頭出し蛇泳ぎゆく

虫籠の中を羽ばたき兜虫かぶとむし

子供らのプール代わりになる盥たらい

遠ざかる流灯ぼんやり眺めおり

墓参り経読む声の詰まりけり

カンナ咲く真昼の太陽はね返し
露草に朝露光りをりにけり
りんだうや人手に渡りみし野辺に
木の影に鳩かたまれる残暑かな
朝顔の日除け目隠し我が家流